

氏名	酒井(阿尾) あすか
学位(専攻分野)	博士(文学)
学位記番号	文博第445号
学位授与の日付	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	文学研究科文献文化学専攻
学位論文題目	風雅和歌集の歌風と展開

論文調査委員 (主査) 教授 大谷雅夫 教授 木田章義 准教授 金光桂子

論文内容の要旨

序章 風雅和歌集の特徴的歌風

本章は、風雅和歌集の特徴的歌風について論じる本論文の梗概である。

南北朝時代に編纂された、後期京極派和歌の勅撰集、風雅和歌集の歌風については、「繊細閑寂化」と「内観性の沈潜」という二つの特徴が指摘されている。前者の繊細閑寂を庶幾する詠歌姿勢は、自ずと内観性、沈潜性という性格を惹起しやすいものであるが、とりわけ同集雑中部を構成する、極めて隠遁志向の強い山家詠歌群においては、この特色が顕著である。これらの歌群においては、閑寂境に充足し、その中へと没入してゆく詠歌態度が一貫して見られ、同集の志向する隠遁の性質をも規定している。同集の、孤独と静寂を肯定的に捉える、閑適ともいふべき隠遁の性格は、従来の勅撰集に見られた厭世的なそれとは様相の異なる点、極めて独自のものがある。こうした隠遁の性格は、漢詩文の影響を受けたものと考えられ、歌材の選択にもそれは明らかに表れている。風雅和歌集には、他の勅撰集には見られない特異な歌材が好んで用いられているが、これらは漢詩文から摂取され、隠遁の自適の心境を表すために、好んで採られてきたものと思われる。従来の研究では、それら特異な歌材を、体系的に見る視点がなかった。それゆえに、なぜ特異な歌材が選択されたのか、明確にし得ない問題があった。本章では、本論文第一編で検討した特異な歌材を通観し、それらがいずれも漢詩的隠遁、隠逸の境地を象徴する歌材であったことを明らかにし得た。

また、もう一つの大きな特徴である「内観性」についてであるが、これに関連して、道理を説き定義づけようとする、理知的、主知主義的詠歌態度によって詠まれた、観念詠を嗜好する傾向が指摘できる。この傾向は、京極派和歌の創始者、京極為兼の和歌思想の影響が考えられるものの、実は、後期歌壇の指導者、花園院の儒教的道德観に基づく所が大きいと考えられる。同院には、為政者が正しい和歌によって世を教化してゆかねばならないという政教思想があり、道理を説く観念詠もその思想の延長上にあるものであった。

つまり、後期歌壇の指導者、花園院自身の在り方が、隠遁志向と観念嗜好という、風雅和歌集の二つの特徴的歌風に強く投影していると考えられる。同院の心中には、持明院皇統の指導者としての義務感と、強い隠遁願望が同居していた。これは、風雅和歌集撰者の光厳院にも継承され、同集の歌風に反映したと考えられる。しかしながら、同集の観念嗜好は、和歌の叙情性を失わせ、その後の京極派和歌の衰退を招く、一つの要因となるものであった。

本論文は、以上に挙げた、風雅和歌集を形成する二つの特徴的歌風について、第一編では隠遁志向を、第二編においては観念嗜好を採り上げて考察したものである。

第一編 第一章 「壁に消えゆく」考 — 京極派詠歌表現の一展開 —

風雅和歌集所収の、永福門院の歌「ま萩ちる庭の秋風身にしみて夕日のかげぞかべに消えゆく」は、従来、光線の推移を捉えた京極派の代表的秀歌として論じられてきた。この歌に詠われた壁は、寝殿造には稀少なためか、勅撰集では、風雅和歌集以外に極めて用例が少なく、特異な歌材である。また、「かべに消えゆく」という陽光の表現も、京極派和歌独特のも

のである。本章では、当該歌がなぜ壁という特殊な歌材を選択し、「かべに消えゆく」陽光を詠むに至ったのかを考察した。

壁は、新古今時代に「壁の中の蟋蟀」や「壁に背く灯火」など、漢詩文に基づいた表現で詠まれるようになるが、表現の典拠となった漢詩句のもつ内観性も併せて摂取して、隠遁的要素の強い歌材として定着化している。京極派においても、この新古今時代の趣向を継承、深化させる形で詠まれており、壁が漢詩的かつ隠遁的の歌材として歌人達に好まれていたことが窺える。

また、「壁に消えゆく」光線という独自表現については、当該歌以外では同じ歌人の一首しか先行例が見られない。永福門院と影響関係にあった伏見院の歌には、「秋の日のかべにくだれるいろ」という表現があるが、これは文選の「別賦」の一節の訓読から摂取したものである。他にも、唐・宋詩では、壁に揺らめく月光、陽光というものが多く詠まれ、定着化した表現となっており、これらは、漢詩の表現から想を得たものと考えられる。特に文選の一節からはその情趣をも摂取して影響を受けたであろうことが推測される。「かべに消えゆく」という、光の一瞬の消滅を捉えた例は、漢詩文にもなく、極めて和歌的な感性によるものであった。京極派和歌が漢詩から材を採りながらも、そこに和歌的な感覚を融合させ独自のものを作り上げていったことが窺われる。

第一編 第二章 炊煙の歌 —『風雅和歌集』雑中を中心として

隠遁志向が最も表れた巻とされる、風雅和歌集の雑中部には、炊事の煙を叙景的に詠む歌が五例見られ一つの歌群を構成している。いずれも炊事の煙が、山間の村里の平穏静寂な様子を象徴するものとして詠まれ、またそれが閑居を題材とした前後の歌の配列から、隠者によって俯瞰されたものであることがわかる。風雅和歌集完成直後に行われた歌合で同様の例が見えるなど、後期京極派和歌において、炊事の煙は隠遁的題材として認識されていた。しかしながら、本来、炊事の煙とは仁徳天皇の説話を本説として、天皇の仁政を讃え予祝するための題材であり、風雅和歌集のような詠まれ方は極めて特異である。

同集撰集期直前に催行された、京極派の五十四番詩歌合には、叙景的に炊事の煙を詠む漢詩が見られるが、そこでは「炊煙」という宋詩語が用いられている。これは宋の詩人、陸游が好んで用いた語で、炊煙が立ち上る里として、しばしば陶淵明の桃花源記に見える理想郷、桃花源が引き合いに出されている。陸游詩では、炊煙をそのような隠れ里に暮らす人間の存在の証明として詠んでいるが、後期京極派はこの宋詩の表現を摂取したものとされる。また、更に直接的な影響関係にあるものとして、隠者の閑寂の境地を炊事の煙に象徴した、陶淵明「帰園田居五首」の一節があげられる。陶淵明は、日本では平安期以降の歌人達にほとんど注目されなかったが、中国では宋代に隠遁詩人として評価の高まった詩人であった。後期京極派和歌の指導者であり、風雅和歌集監修者でもあった花園院は、新来の宋代の詩話集『詩人玉屑』を入手しているが、宋代の陶淵明評価の高さを同書より知ったと思われる。また、同書を加点了学僧、玄恵が、先述の五十四番歌合の参加者であったことなどから、後期京極派歌人達が陶淵明の表現の影響を受けたことが窺われるのである。風雅和歌集、雑中における炊事の煙は、自然と融合した人間の生活を象徴する隠遁的素材として詠まれ、その隠遁の性質は、漢詩的な隠遁といえるものであった。そこには田園詩人、陶淵明への共感が込められている。陶淵明は清澄な境地の隠者として、五山の禅僧達に好まれた詩人であった。花園・光厳院は禅宗に深く帰依しており、炊煙を題材とした歌群は、両院の禅の境地への強い希求の表れととることができるのである。

第一編 第三章 暁の鳥 —『風雅和歌集』雑中の鳥詠をめぐって—

前章でも採り上げた雑中部には、鳥の生態を叙景的に詠じた歌が五首入集している。そのほとんどが暁の鳥に関する歌であり、このような詠まれ方は和歌の中で極めて特異である。鳥は、勅撰集中、風雅和歌集のみに突出して用例の多い歌材であるが、そもそも、和歌において定着化するものではなかった。これは、枕草子の記述からも窺えるように、鳥が王朝の美意識からは逸脱した、雅びさとはほど遠い存在として認識されていたことによる。一方、漢詩の世界においては、鳥はその生態を叙景的に詠むものも見られ、十分に詩的世界を形成しうる題材であったと思われる。風雅和歌集撰者もそのような意識のもと、鳥の歌を入集させ、特に生態を叙景的に詠む漢詩には学ぶところがあつたと思われる。

同集の鳥の歌を検討してみると、万葉集や枕草子など王朝古典における鳥の情景を元としながら、そこへ漢詩における鳥の表現の詩的情趣を摂取して、それを情緒的なものへと転化変容させるという手法がとられている。とりわけ、明け方の鳥を詠む歌では、源氏物語・宇治十帖の「総角」の場面から着想を得、そこに漢詩の情趣を取り入れることで、隠遁的性質を

獲得している。

しかしながら、風雅和歌集の暁の鳥への関心は、漢詩から直接的な影響を受けて形成されたものとは言い難い。むしろ、新古今歌風から直接的な影響を受けたものと思われる。京極派和歌には鳥の黒色という、色彩に注目した歌が見られるが、このような色彩への関心は、新古今時代に生じたものであった。暁の鳥が題材として好まれたのも、暁の薄明と鳥の黒色という色彩のコントラストの面白さからであったと思われる。

風雅和歌集において暁の鳥の歌は、漢詩や宇治十帖の表現に影響を受けたことで、漢詩的隠遁と王朝的隠遁という二つの性格を帯びることとなった。それは、王朝文化から禅文化へと移行してゆく時代状況と、同時に花園院の在り方を投影したものであったといえよう。

第二編 第一章 「力あり」ということ 『光厳院三十六番歌合』判詞をめぐって

風雅和歌集完成直後に行われた、光厳院三十六番歌合は、歌の判定には光厳院の意向が大きく働いたと考えられる。同歌合では、「力あり」という褒詞が三例あるが、この語は他の歌合判詞に見えるそれとは意味が異なっている。通常の歌合において、「力あり」とは、歌の簡明な表現や強い語調、雄勁なイメージを評価する語であった。にもかかわらず、光厳院三十六番歌合においては、風格ある詠いぶり、格調高さに対して用いられている。この現象は、脆弱、雄勁に過ぎる表現を避け、古今和歌集に見られるような、格調高く端正な和歌表現を志した花園院の和歌観の影響から生じたものと思われる。この和歌観は、光厳院にも継承される、正しい和歌によって世を教化するという正風思想であり、後期京極派における「力あり」とは、政教性を含んだ言葉であったことが窺われる。

第二編 第二章 花園院と紀貫之 —『風雅和歌集』所収の貫之歌を中心に—

花園天皇宸記には、前期京極派和歌の指導者、京極為兼や伏見院の主張の正当性を説き、紀貫之が自らの和歌の手本であることを強調した記事が見られる。この記述には、二条為世が貫之の評価に消極的な態度をとっていることへの非難もあり、京極派と二条派の和歌観の違いを示している。実際、二条派では、勅撰集において貫之がほとんど入集しておらず、歌苑連署事書の記述からも評価の低かったことが窺われる。一方、京極派の勅撰集では貫之は多く入集し、巻一の巻頭歌に貫之の歌、もしくは貫之の歌を念頭においた歌が撰ばれ、貫之への高い評価が見られる。特に風雅和歌集では、貫之が古歌人としては定家の次に多く入集するなど、御子左家三代を重んじる他の勅撰集と比べ、特異な傾向を示している。また、同集所収の貫之歌の特徴として、独自、もしくは定型化していない表現を用いながら、歌意が明確であることや、主知主義的な態度で詠まれた観念詠のあることが挙げられる。このような詠風は、歌風成立初期と、後期の京極派歌風のそれに酷似している。貫之の、風雅和歌集多数入集は、為兼の主張を重んじ、簡潔で明確な表現と観念的な和歌を嗜好した花園院の和歌観に拠るものと考えられる。しかしながら、同院の貫之重視の態度は、義理・道義を明らかにするという儒教的道徳観がその根底にあった点、為兼と少しく異なっている。

ところで、和歌でこのような論理性を追求すれば、和歌は抒情性を失い、文芸としての生命を喪失する。これは、後期京極派歌風のその後の衰退を示唆しているといえよう。

論文審査の結果の要旨

中世の和歌の世界は、その時期の歌壇の主流であり続けた二条派の、伝統を墨守しての平淡さの中に沈んでいたと言えようが、その中であって京極派の藤原為兼撰『玉葉集』、および光厳院が叔父花園院の指導のもとに編纂した『風雅集』は、他の勅撰集にはない新奇な表現によって異彩を放っている。しかし二条派主導の歌壇において、それはむしろ異端視され、非難されることが常であり、近代の和歌史研究の上でも、十分に注目され、正当な評価を受けてきたものとは必ずしも言えない。

論者は、京極派の歌のその新しさを、本論文の前半の第一編において、まずは漢詩文との関わりにおいて具体的に検証しようとする。たとえば、その第一章は、京極派歌人の指導者のひとりであった永福門院の歌、「ま萩ちる庭の秋風身にしまて夕日のかげぞ壁に消えゆく」が、壁を照らす夕日の光がやがて消えようとする新鮮な景を描くのを、そもそも日本の寝殿造の建物には壁が目立たず、あっても調度類に覆われて歌に詠まれることが少なかったという事実を周到に考証した上で、「落景揺紅壁」や「斜暉麗粉壁」などの唐宋の詩句の受容であったことを推測する。また、「吹煙の歌」と題する第二章でも、

『風雅集』以前の勅撰集では、仁徳天皇の「民のかまどは賑わいにけり」の古歌によって、必ず時の治世を寿ぐ政教的な意で詠まれるものであった炊事の煙が、『風雅集』の歌では、隠者の目から見た、山里の、寂寥感あふれる景物として描かれるようになった変化の由来を問い、その編纂にも関わった花園院が、五山版もある『詩人玉屑』などを經由して陶淵明の詩に親しみ、彼の「曖曖遠人村、依依墟里煙」という詩句に接していたこと、さらに、淵明を高く評価した陸游などの宋代詩人に「炊煙」という詩語が愛用されたことなどを指摘した上で、それが和歌における詩語の受容と考えられることを論ずる。炊事の煙、あるいは壁の上に消える夕日の光という、今までさほど関心をもたれてこなかった小さな和歌表現の分析から出発して、南北朝期の歌壇において、唐宋詩、あるいは陶淵明などの詩が重要な影響を及ぼしていたこと、その背景に隆盛に向かいつつある五山文学があったことなどを明らかにするものであった。今後の京極派和歌の研究が、そのような比較文学的手法なしに為しえないことを明示する卓論として評価できよう。

第二編は、第一章は『風雅集』直後の歌合の判詞に用いられた「力あり」という語の分析を通じて、光厳院が『古今集』に見られる格調を理想としたことを論じ、第二章では、二条派の編纂した他の勅撰集と玉葉風雅二集における紀貫之歌の撰歌数を比べ、後者がはるかに多いこと、京極派がより貫之を重視することを明らかにした上で、その背景として、京極派の主導者であった藤原為兼に主知的、観念的な歌風があったこと、さらには、花園院が義理を明らかにすることを重んじる儒教的な和歌観をもっていたことなどを推測した。花園院は五山文学に親近し、宋代の新儒学にも影響をうけていたことが説かれているが、もしそうであるなら、はるかに時代を異にするとはいえ、漢詩文の圧倒的な影響下に和歌の表現を革新することに努めた紀貫之と院とは、類似の役割を文学史の上に担っていたことになる。花園院における貫之への共感とは、和歌史を巨視するためにも重要な指摘であった。

そのように画期的な新見を次々に示した本論文にも、なお足らざる点は少なくない。第一に、和歌表現の分析がしばしば詳細になりすぎて明晰を欠き、全体の論の構造までもぼやけてしまうことである。枝葉末節を捨てる態度が大切であろう。第二には、京極派における漢詩文受容を考えることを大きな目標としながら、漢詩文についての目配りが必ずしも十分ではないことである。特に、判詞の「力あり」の分析をする第二編第一章において、中国詩話に用いられる「有力」という語への着目がなかったのは残念なことであった。五山文学、『花園院宸記』などの漢文資料を読みこなし、南北朝期における学術と和歌との関わりを広く深く考えるという困難な仕事が、今後の論者を待ち受けているであろう。さらなる精進を期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成二十年二月十八日、調査委員三名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。